

## 7.子ども食堂利用者とは：

利用者の年齢層に着目し分析し、子ども食堂利用者とは何かを問い直した

黒岡宥菜

### 始めに 子ども食堂の現状

本稿の目的は、近年の子ども食堂ブームにおいて欠落しがちな情報である子ども食堂の利用者について、子どもの年齢層の視点から検討することにある。現在、子ども食堂という言葉をよく耳にするようになった。子ども食堂は2012年から始まったが、その後急速に増えている。現在の子ども食堂の数は、NPO 法人全国子ども食堂支援センター・むすびえによると、少なくとも全国で3718か所あるとされ、愛知県でも子ども食堂の数が140か所ほどある。さらに増加率は最大228%であり、直近2年を上回るペースである。子ども食堂について、子ども食堂とは、保護者の就労等により、家庭において保護者らとともに食事を摂ることができない子ども等を防ぐため、夕食の提供や交流を図り、子ども食堂に参加する子どもたちが、子ども同士あるいは、子どもを支える支援者らとともに過ごす取り組みである(吉田祐一郎、2016)。子ども食堂は公的な定義は存在せず、行っている取り組みや名前なども子ども食堂によって違いはある。だが、子ども食堂には様々な機能があるとされる。主に、食を通じた支援、居場所、情緒的交流が子ども食堂にあるとされ、子ども食堂の機能は単に食事をするだけにとどまらない。このような取り組みが全国的に増えている現状である。

このように子ども食堂が全国的に急速に広まった経緯としては、2つある。1つめは、政府が2009年に初めて相対的貧困率(世帯所得が標準的所得の半分以下の割合)を公表したことである。これによって表面上は見えてこなかった貧困層の存在が、社会的に認知されるようになったことだ。2つめの理由は、子どもの貧困層が増加していることである。子どもがひとりでご飯を食べる「孤食」と伏せて、近年はメディアで取り上げられることが多くなった。この長い間知られていなかった事実が急速に広まったことにより、子どもたちを助けたいという思いや子どもにある問題を助けたいという思いから「子ども食堂」という活動が全国に広まった。

このような経緯で子ども食堂は広まったが、子ども食堂に来る子どもたちは、貧困層の子に限ったことはない。貧困層の子だけでなく地域の子もたちや高齢者、子育てをしている親などが気軽に來ることが出来る場所でもあることが多い。

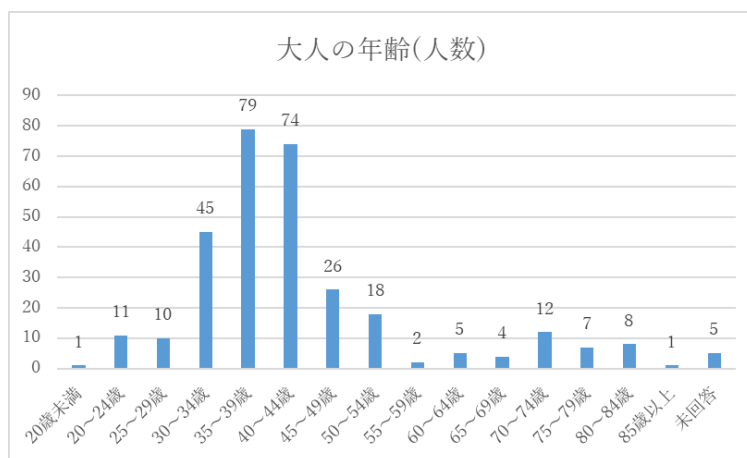
子ども食堂は、今やご飯を食べるだけではなく、体験イベント・学習支援をしている子ども食堂も多い。さらに、子ども食堂は、未就学児から高齢者まで様々な年齢層が集まる地域の居場所でもある。本稿では、近年の子ども食堂ブームにおいて欠落しがちな子ども食堂利用者にスポットを当てて述べていく。調査では子ども食堂利用者の学年や年齢によって差があるのかをさらに考えていき、そして、子ども食堂利用者の状況を調査するとともに「子ども食堂利用者」という言葉を考え直し、子ども食堂とは何かを考えていきたい。

## I. 子ども食堂利用者について

### 1. 利用者の状況

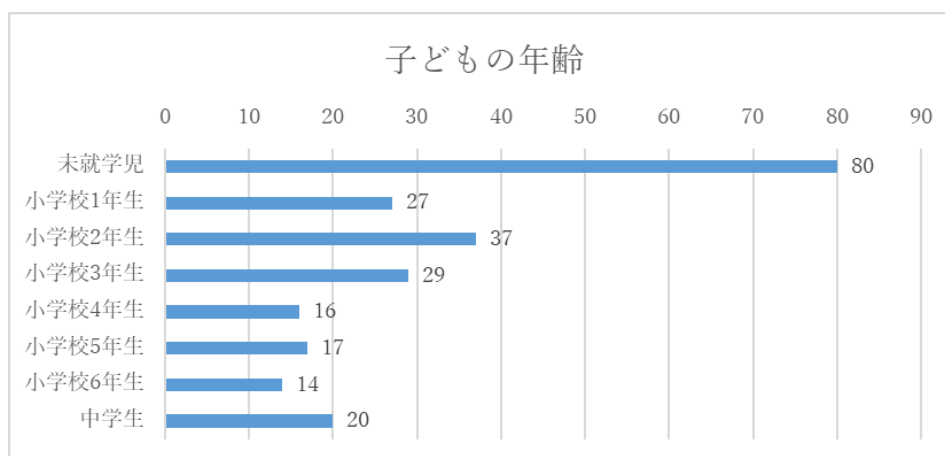
まず、子ども食堂に來ている大人について見てみる。

## 問2 年齢(大人) (N=308)



大人の年齢層について、「30～34歳」と「40～44歳」が最も多い年齢層だということがわかる。子育て世代が多く来ているからと思われる。また、高齢者も子育て世代と比べて多くはないが来ている高齢者も多い。

## 問5 一緒に来ている子どもの年齢(大人)



子ども食堂へ大人と一緒に来ている子どもの年齢で最も多いものは未就学時であった。未就学児は一人で行動することが少ないから多いとみられる。小学校低学年は30人前後になっており、小学校高学年になると20人を切る。子ども食堂へ来る大人は子どもが小さいほど多くなっていることがわかる。

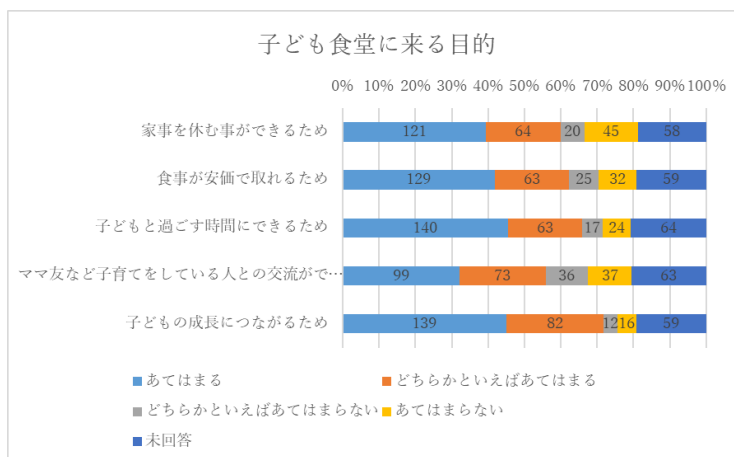
次に大人が子ども食堂へ来る目的を見ていく。

大人が子ども食堂へ来る目的として多い項目は、「当てはまる」・「どちらかといえば当てはまる」を合計すると、子どもの成長につながるためと答えている人が最も多く、次に、子どもと過ごす時間にできるためが多い。最も少ない回答は家事を休むことができるため・ママ友など子育てをしている人との交流ができるためが少ない。

この結果から、子ども食堂へ来る大人は、子どものために子ども食堂へきている利用者が多いことが分かる。家事は食事以外でもたくさんあるため、子ども食堂へ来ることによって家事をする割合は多少しか変わらないと感じる人が多いと思う。子育てをしている人への

交流ができれば、さらに子ども食堂が子どもだけでなく、子育て世代の交流の場になるのではと考えた。

### 問 12 子ども食堂に来る目的(大人) (N=308)



次に、普段の子どもとの様子について見る。

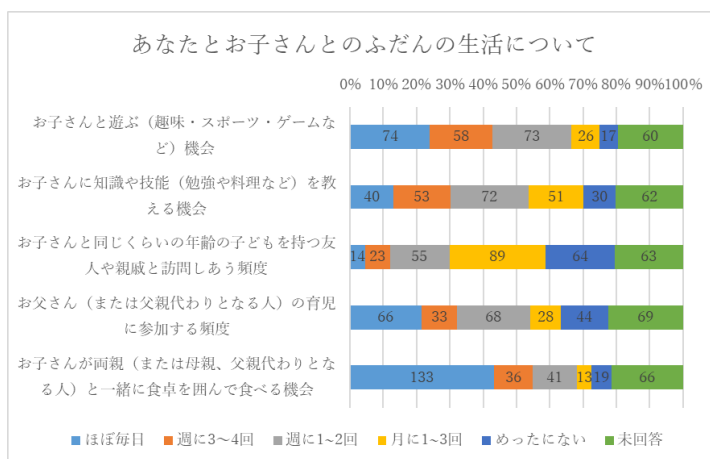
「お子さんと遊ぶ」の項目では、ほぼ毎日が最も多く、ほぼ同じ数いる項目が週に1～2回である。このことから、ほぼ遊ぶ人も多い一方で週に1～2回の人も多いことが分かる。次に多いものが週3～4回であり、70%を超える人が週に数回は子どもと遊んでいることがわかる。

「知識や技能を教える」では最も多いものは週に1～2回であり、次に多いものは週に3～4回である。およそ50%以上の人々が週に数回は知識や技能を教えていることが分かる。

「同じくらいの年齢の子どもを持つ友人や親せきと訪問し合う頻度」は、最も多いものは月に1～3回である。めったにないと答える人も多い。

「お父さんの育児に参加する頻度」は、ほぼ毎日と週に1～2回がほぼ同数であり、次に多いものはめったにないである。参加する人もいるが、参加しない人も一定数いることが分かる。

### 問 10 お子さんと普段の生活



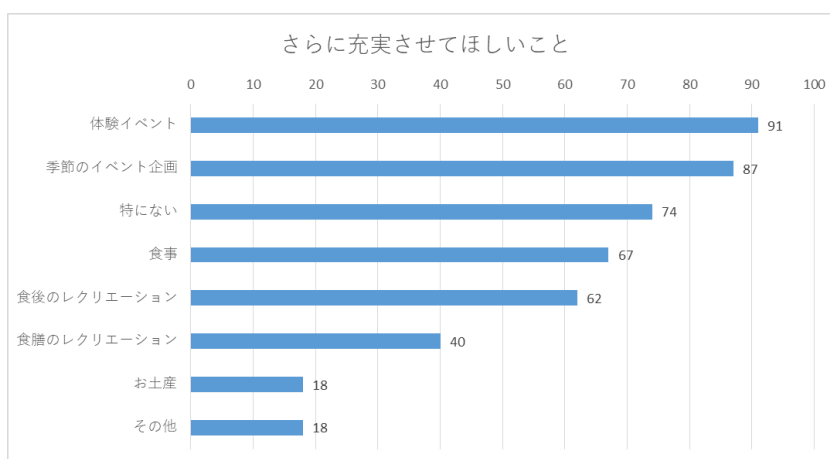
「両親と一緒に食卓を囲んで食べる頻度」はほぼ毎日が圧倒的に多い。ほとんどの家庭が一緒にご飯を食べていることが分かる。

このアンケートの結果から、子どもとなんらかの形で触れ合う人は多いことが分かる。

しかしその一方で、遊んだり一緒に食卓を囲んだりすることがほぼないと答えている人もいることが分かった。

次は、子ども食堂でさらに充実させてほしいことを見る。

### Q7 子ども食堂でさらに充実させてほしいこと (N=308)

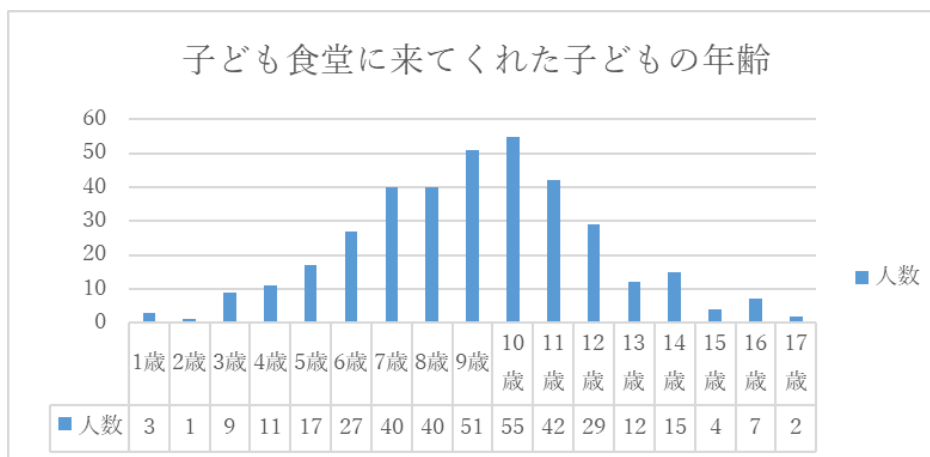


大人がさらに充実させてほしいことは、最も多い項目が、体験イベントで、次に多いのが、季節のイベント企画、次が、特にない、食事が続く。この結果から、子ども食堂に食事だけでなく、体験イベントなど子どもが楽しめる・成長できる・様々なものに触れ合える機会を望んでいることが分かる。

子ども食堂が、子どもに対して食事だけでなく、体験イベントなどを通して、成長できる機会になればいいと考える。

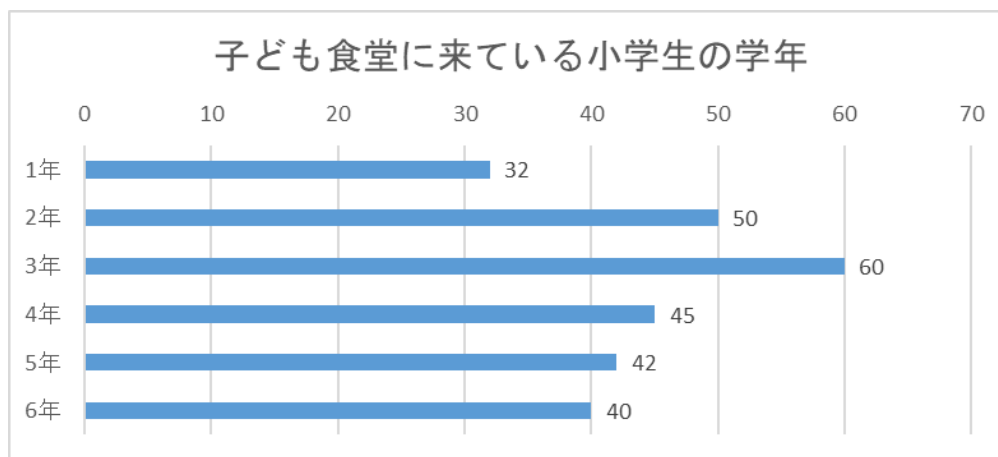
次に子どものアンケートを見てみる。

### 問1 年齢

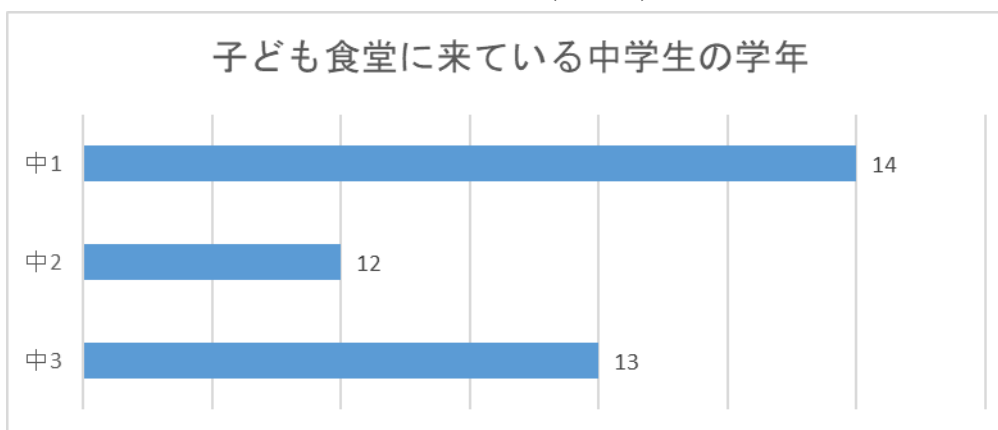


子どもの年齢は 10 歳が多い。7 歳から 11 歳が子ども食堂へ来る主な年齢層であることが分かる。

問 1-2 学年(小学生)



問 1-3 学年(中学生)

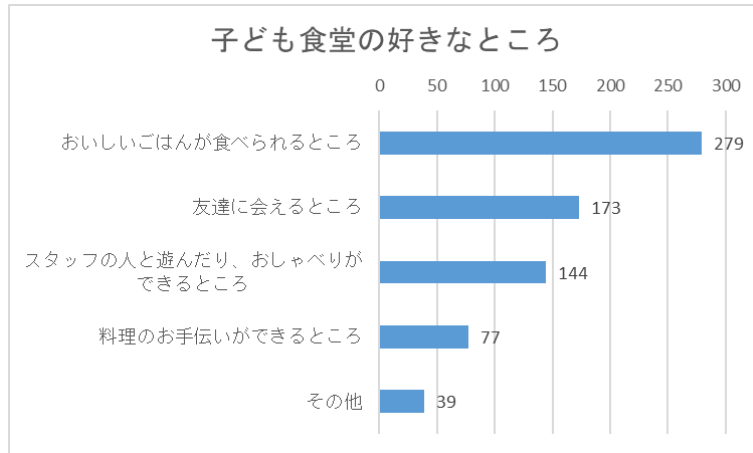


子ども食堂へ来ている子どもの学年は小学校 3 年生が最も多く、次に小学校 2 年生、4 年生と続く。小学生は小学校 1 年生から 6 年生まで幅広く来ていることがわかる。また、中学生を見てみると中学生はどの学年も 13 人前後であり特に多い学年はないことがわかる。

次に子ども食堂の好きなところを見てみる。

子ども食堂の好きなところは、最も多いのが、おいしいご飯を食べられるところ、次に多いものは、友達に会えるところ、スタッフの人と遊んだり、おしゃべりしたりできるところが続く。子どもはご飯が食べられるから子ども食堂へ行く目的になっているのではないかと考える。ただ、この項目に体験イベントがないため、体験イベントがあれば結果が違ったのではないかと考えられる。

### 問3 子ども食堂の好きなところ



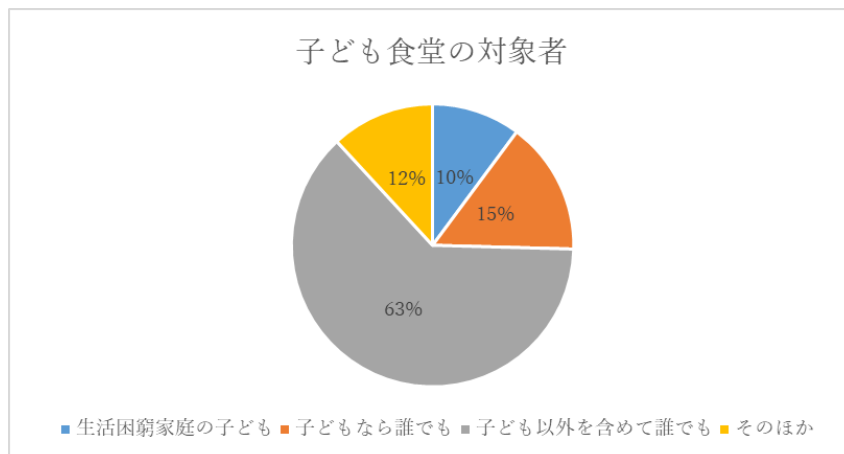
またその他の意見としては、次の意見が挙げられた。

落ち着く	1	年下の子と遊べる	2
いっぱいおもちゃがある	1	家では作らないメニューが食べられる	1
笑顔になれる	1	自分で作れる	2
宿題ができる	2	駄菓子屋のお菓子コーナー	2
勉強ができる	2	子どもたちと楽しく食べられる	1
カラオケが無料でできる	2	イベントが楽しみ	1
初めて会う子との交流	1	楽しいから	2
気楽に食べられる	1		

勉強面や子どもと触れ合えること、さらにイベントなどが子ども食堂の好きなところとして挙げているものが多かった。

また、運営者アンケートで子ども食堂の年齢層や子ども食堂対象者を見ていく。

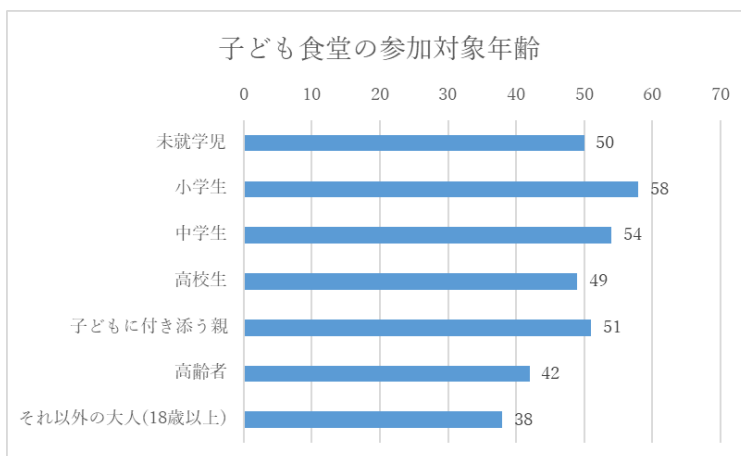
### 問8 子ども食堂対象者について (N=59)



この結果から子ども食堂の対象者として子ども以外を含めて誰でもという回答が最も多く63%になる。生活困窮家庭の子どものみは全体の10%ほどであった。

次に運営者で子ども食堂の参加対象年齢をしてみる。

### 問9 子ども食堂の参加対象年齢(当てはまるもの全て)



このアンケートの結果からほとんどの子ども食堂が小学生を中心にすべての年齢で子ども食堂対象者を来ても良いとしていることがわかる。

この大人・子ども・運営者の単純集計の結果から、わかったことは、子ども食堂利用者の子どもについては、小学生が最も多いこと、そして好きなおところはおいしいご飯を食べられるからということがわかる。

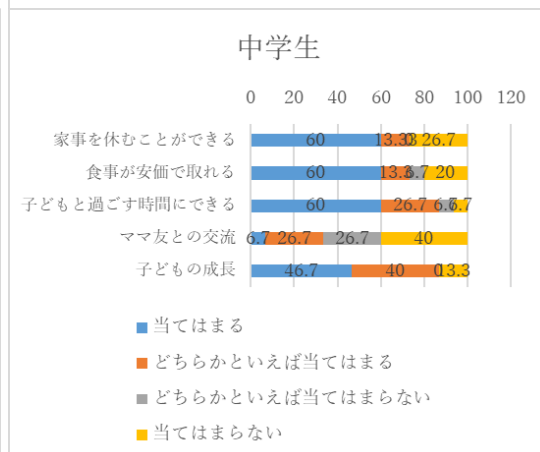
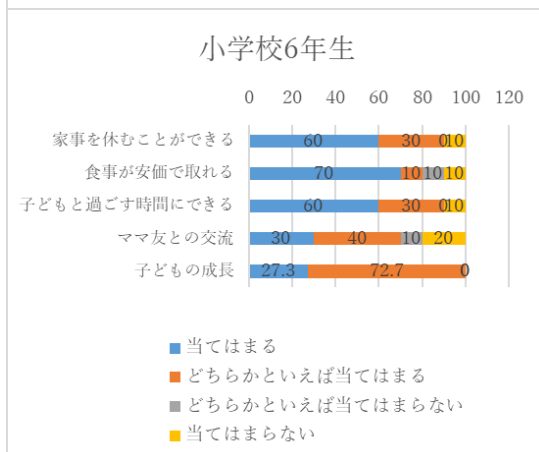
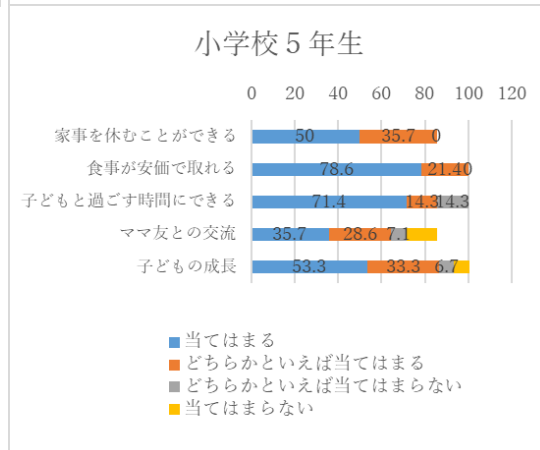
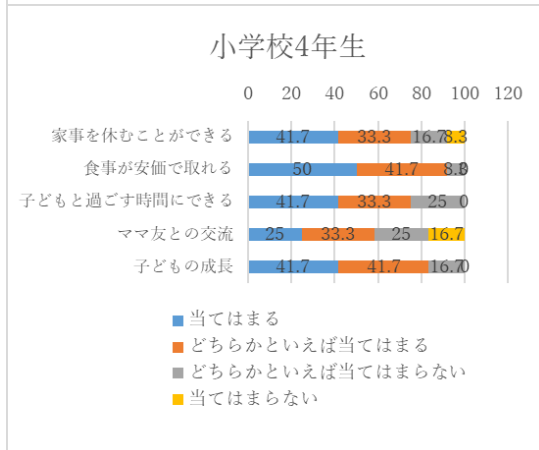
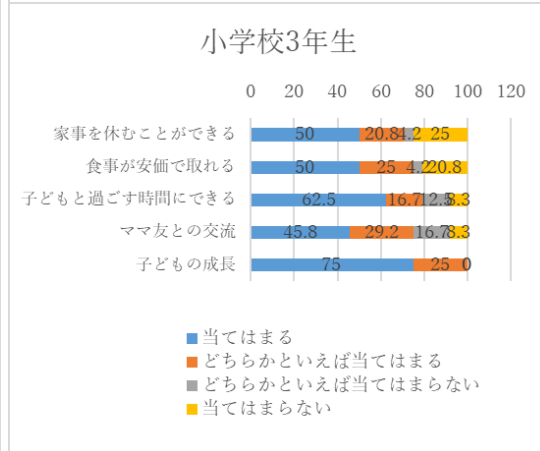
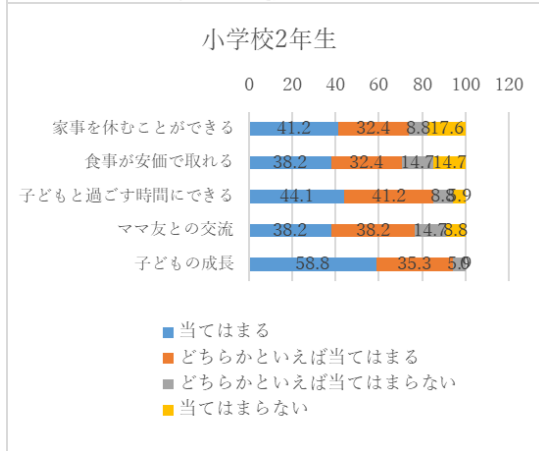
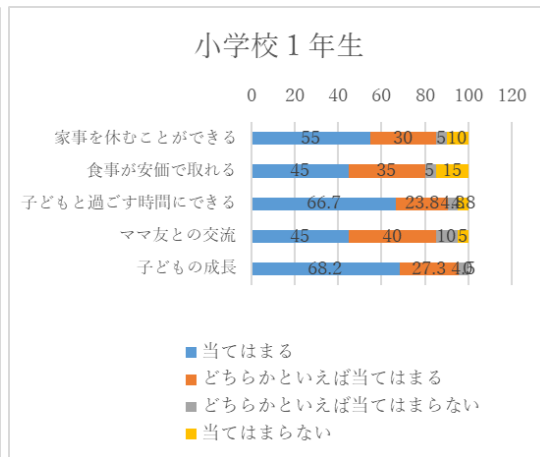
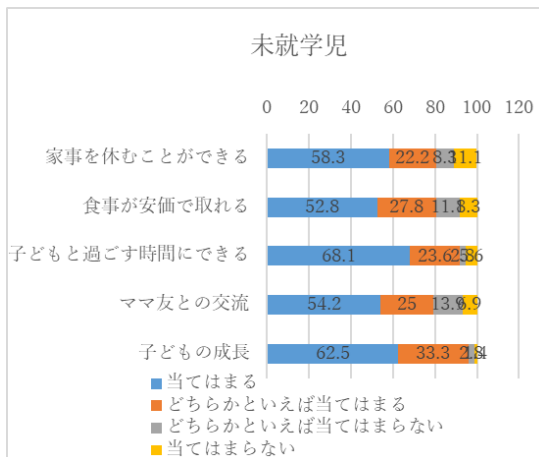
大人のアンケートでは、大人の年齢も子育て世代が多いが、高齢者もいること、一緒に来ている子どもは未就学児が多いこと、子ども食堂へ来る目的は子ども関連が多いことがわかる。

最後に運営者では、子ども食堂の対象者・参加対象年齢ともに、すべて来ても良いとしている子ども食堂が多いことが分かった。

この単純集計の結果から次のクロス集計ではさらに詳しく子ども食堂利用者についてみていこうと思う。

#### 2. クロス集計…年齢別に利用者を見ていく

2章の単純集計の結果から、さらにクロス集計をして年齢別に利用者について詳しく見る。大人のアンケートから子どもの年齢×子ども食堂に来る目的をクロス集計する。





子ども食堂へ来る目的の項目で別々に見ていく。

「家事を休むことができる」では、当てはまる・どちらかといえば当てはまるを合計すると、およそどの学年でも 8 割前後にあることが分かる。当てはまらないでは、中学生が多く、子ども食堂へボランティアとして参加している人もいる可能性があるため多くなっているのではと考えた。

「食事が安価で取れる」でも当てはまる・どちらかといえば当てはまるを合計すると、どの学年も 8 割前後になっていることが分かる。当てはまらないは小学校 3 年生と中学生が多い。中学生は大人料金になっている可能性が高いため、当てはまらないと答える人が多いと考える。小学校 3 年生についてはあまり分からないが、兄弟姉妹と一緒に来ている可能性が多いため、兄弟姉妹の分も含めると多くなってしまっているのではないかと考えた。

「子どもと過ごす時間にできる」でも当てはまる・どちらかといえば当てはまるを合計すると、8 割前後になっていることが分かる。

「ママ友との交流」では、未就学児から小学校 3 年生までと小学校 6 年生が 8 割前後の人が当てはまる・どちらかといえば当てはまると答えていることが分かる。小学校 4・5 年生は 6 割前後、中学生は 4 割弱となっている。小学校 6 年生の数字を除くと学年が上がるにつれて、ママ友との交流で子ども食堂へ来ている人が少なくなることが分かる。小学校高学年や中学生になると、子ども食堂へ来ることも減ってくるため、同じ世代のママ友が減ることが原因だと思われる。

「子どもの成長」では、全部の学年が 8 割以上、最も多くて 10 割が、当てはまる・どちらかといえば当てはまると答えていることが分かる。

このクロスの結果から、「子どもの成長」がどの学年でも多いことが分かる。また、「ママ友の交流」のみが学年ごとに差があった。しかしその項目以外はどの学年も大体 8 割ぐらいになっていることが分かる。ほとんど学年ごとに差はないことがわかる。

さらに大人のアンケートで子どもの年齢と充実させてほしいことをクロス集計する。(グラフは次頁)

これは、大人のデータであるが、子どもの年齢と充実させてほしいことの結果である。「体験イベント」が一番多くなっている学年が多かった。「体験イベント」は、小学校 2・6 年生以外の学年で最も多くなっている。最も割合が多い学年は小学校 1 年生である。反対に最も少ない学年は小学校 6 年生である。「体験イベント」について、高学年や低学年で意見が分かれているかと考えていたが、子どもの成長段階において差がないことが分かる。

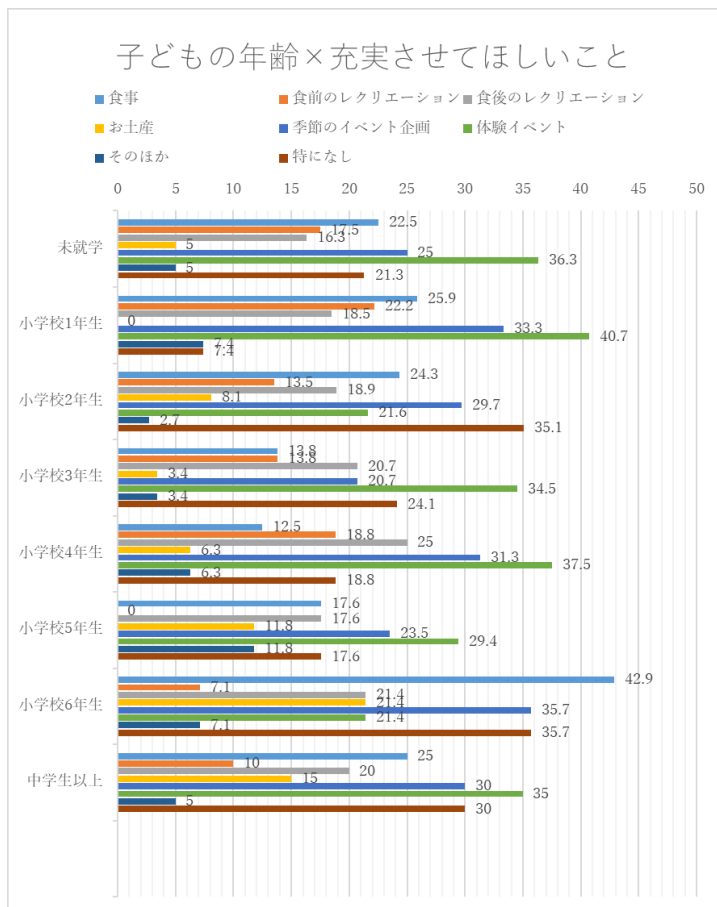
「体験イベント」が少なかった小学校 2 年生を見てみると、「特になし」が約 35%を占めている。「特になし」に絞ってみると、小学校 6 年生と中学生が「特になし」の割合が多く、小学校 1 年生が最も少ない傾向にあった。小学校 6 年生と中学生においては、体も心もある程度成長してきているため、子ども食堂に求めるものも少なくなるのでは、と考えた。しかし、小学校 2 年生も多いため、小学校 2 年生の割合についてはあまり特徴がつかめなかった。

さらに子ども食堂で大切な「食事」について見てみる。「食事」は全体的にどの学年も 20%前後になるが、小学校 6 年生だけは、約 43%と他の学年の約 2 倍になっている。

そして、「お土産」について見てみる。「お土産」は、小学校 4 年生までは、10%に達しないが、小学校 5 年生からは、10%以上になり、小学校 6 年生は、21%ほどになる。高学年に

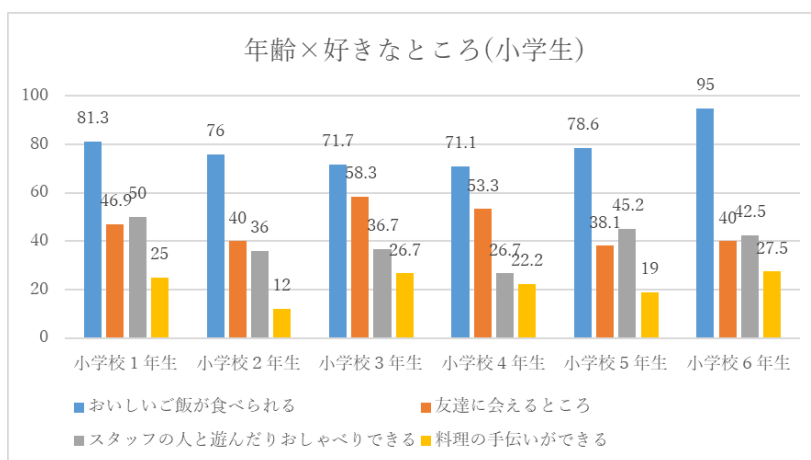
なるにつれて、お土産が重要視されていくのではないかと考えた。

このアンケートでも、ところどころ差はみられるものもあるが、学年ごとに差は対して見られなかった。

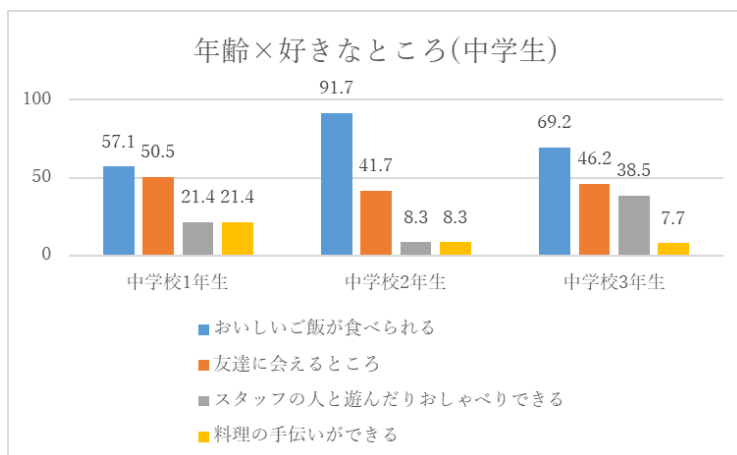


未就学…33.33% (80)  
 小学校1年生…11.25% (27)  
 小学校2年生…15.42% (37)  
 小学校3年生…12.08% (29)  
 小学校4年生…6.67% (16)  
 小学校5年生…7.06% (17)  
 小学校6年生…5.83% (14)  
 中学生以上…8.33% (20)  
 ※()は人数

さらに、子ども食堂に来ている子どもの年齢から子ども食堂の好きなところを見ていく。年齢と好きなところをクロス集計する。



小学校1年生…32人  
 小学校2年生…50人  
 小学校3年生…60人  
 小学校4年生…45人  
 小学校5年生…42人  
 小学校6年生…40人



中学校 1 年生…14 人  
 中学校 2 年生…12 人  
 中学校 3 年生…13 人

小学校のみであると、どの学年も「おいしいご飯が食べられる」が最も多い。特に 6 年生の「おいしいご飯が食べられる」という回答がどの年齢よりも多くなっていることが分かった。さらに 6 年生に着目すると「おいしいご飯が食べられる」という回答以外で半数を超えるものはなく、圧倒的にご飯が食べられるという回答が多くなっていることが分かる。

3・4 年生に着目すると、他の学年と比べて、「友達に会える」が半数を超えて多くなっていることが分かる。3・4 年生は子ども食堂の中でも来る人数が多く、さらにクラス替えを経て友達が多くなっていく時期であると考えられる。

学年ごとにわずかな差はあるが、大きな傾向はあまり掴めなかった。

中学生では、2 年生が極端に「おいしいご飯が食べられる」という項目が多くなっていることが分かる。どの学年も人数はほとんど同じことから、2 年生はご飯が目的な事が多いのではと考えた。しかし、学年ごとには差があるが傾向があまりつかめなかった。

ここまでの「子どもの年齢×子ども食堂へ来る目的」「子どもの年齢×充実させてほしいこと」「学年×子ども食堂の好きなお店」のクロス集計をしてきたが、年齢や学年ごとに差はある項目もあるが大きな傾向はあまりつかめなかった。

利用者の年齢ごとに興味があるものや好きなものがあると想定していたが、このアンケート調査では見られなかった。年齢や学年ごとに成長段階や興味のあるものが変わっていくのかを調べた。

調べた結果、年齢ごとに成長段階や発達課題が異なることが分かった。ここでは、子ども食堂の主な対象者である小学生を、低学年・中学年・高学年で見えていく。さらに中学生も見えていく。

始めに、小学校低学年は、善悪について理解と判断ができるようになってくる時期であり、さらに、言語能力や認識力が高まり、自然の関心が生まれてくる。小学校低学年の家庭で起こる現象として、保護者が自信をもって子育てに取り組めなくなってくる現象があり、こうした家庭における子育て不安の問題や、子ども同士の交流活動や自然体験の減少から、子どもが十分に社会性を身に着けないまま小学校へ入学するし、精神的にも不安定になり周りの子どもなじめない、という現象が起こりやすい時期でもある。成長段階の課題として集団やルールを守ることや自然や美しいものに感動し心の育成をすることが良いとされる。

次に、小学校中学年では、運動能力や知的能力が上昇してくる時期であり、社会的能力が

広がり、地域の施設や行事などに興味を示し、自然等への関心も増してくる。さらに学習活動に一層興味を示し、計画的に行動できるようになる。

さらに、小学校高学年では、物事をある程度対象化として認識し、知的な分析ができるようになり、自分のことを客観的にとらえ、集団活動に主体的に参加する。理想主義な傾向もみられる。小学校高学年の発達課題としては、体験活動の減少から人やモノに直接触れることや自己肯定感の育成、自他の尊重・他者への思いやり、集団における役割の自覚・実社会への興味関心などがあげられる。

最後に、中学生に関しては、思春期に入り、自分の生き方を模索する時期である。大人よりも友人関係に強い意味を見出し、親に対して反抗期になり、コミュニケーションが不足する。また、仲間同士の評価を強く意識する反面、他者との交流に消極的な傾向もみられる。さらに、この時期に不登校の子が増加しやすい。中学生の発達課題として、人間としての生き方をふまえ、自らの個性や適性を探求する経験を通し、自己のあり方を思考すること、社会の一員として自立した生活を営む力の育成があげられる。(文部科学省)

調べた結果、このように子どもの年齢によって発達段階や興味のあるもの、家庭の様子なども変わってくるのがわかった。しかし、家庭の状況や兄弟姉妹の有無、地域ごとに差はあると思うため、アンケートでは差が見られなかったと考えられる。

このアンケートでは、年齢ごとに差は見られなかったが、子ども食堂利用者全体としては、どの学年も「おいしいご飯が食べられる」からきている子が多く、子ども食堂でさらに充実させてほしいことはほとんどの学年が「体験イベント」であることが分かった。

## II. 子ども食堂利用者とは

しかし、子ども食堂利用者とはそもそも誰なのかということ考えた。子ども食堂利用者について、誰もがイメージするものは、「子ども」だろう。名前に「子ども」とついているため、もちろん子どもが一番の利用者と考えることが普通である。さらに、子どもを育てている親世代も対象者であるも多い。また、子ども食堂は子どもがひとりでご飯を食べる「孤食」や子どもの貧困と共にニュースや新聞などのメディアで取り上げられることが多いことから、貧困の子が行くところという認識もあるかもしれない。

しかし、利用者の視点を変えてみると、子ども食堂は貧困の子だけでなく、地域の子どもや高齢者、さらに運営者やスタッフなども利用者ということになるのではないかと考えた。

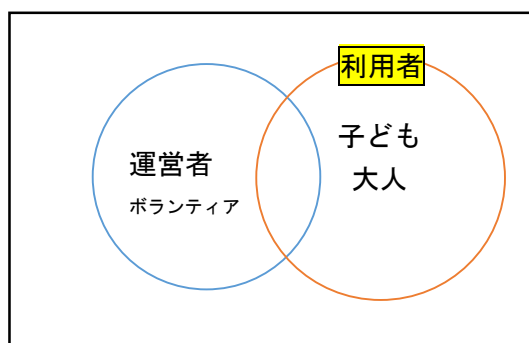


図 1

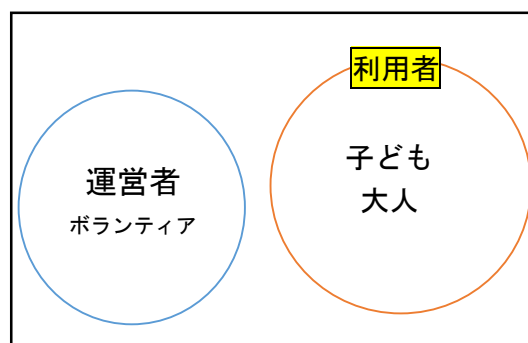


図 2

これは考えられる利用者の構図である。このアンケートをするまでは、図 2 のように考え

ていたが、図 1 である可能性もあるのではないかと考えた。図 2 について子ども食堂利用者は子どもと大人だけであり、運営者やボランティアは、利用者ではなく、あくまでも子どもたちを支える側である図である。しかし図 1 は子どもと大人も利用者であるのは当然だが、運営者やボランティアも利用者の一部になっているのではないかと図である。

子ども食堂はボランティアで運営していることが多い。儲けるものではなくて、子どもたちを救う目的や地域の居場所づくりが目的で子ども食堂をしている運営者が多い。市場にある一般的な、生産者・販売者・消費者のようなモノを「作る」「売る」「買う」のような関係でもなく、自治会のような、市民・市議会・市長・行政のような関係でもない。子ども食堂は子どもや地域の人に居場所を与えることやご飯を食べられない子などにご飯を与えるものである。運営者の思いは、子どもや地域の人に居場所を作り安心できる地域社会になることやご飯が満足に食べられない子どもにご飯を食べさせて子どもたちを救うといった目的でしていることが多い。子ども食堂は利益を出すことを目的と敷いていない。

子ども食堂において、子どもや大人と運営者やボランティアの関係は、子どもや大人は運営者やボランティアからご飯や子ども食堂という居場所を与えられ、運営者やボランティアは子ども食堂があることによって自分の居場所になったりすることや子どもたちの元気やパワーをもらえるといった構図がみえてくると考える。そのような構図が図 1 である。運営者やボランティアと子どもや大人は利用者として重なり合う部分があるのではないかと。

利用者とは、「広い意味では、何かを使用する者、全般について使われる言葉である。物や施設・サービスを利用するものは利用者と呼ばれる」と書いてあることから、子ども食堂利用者として当てはまると思う。

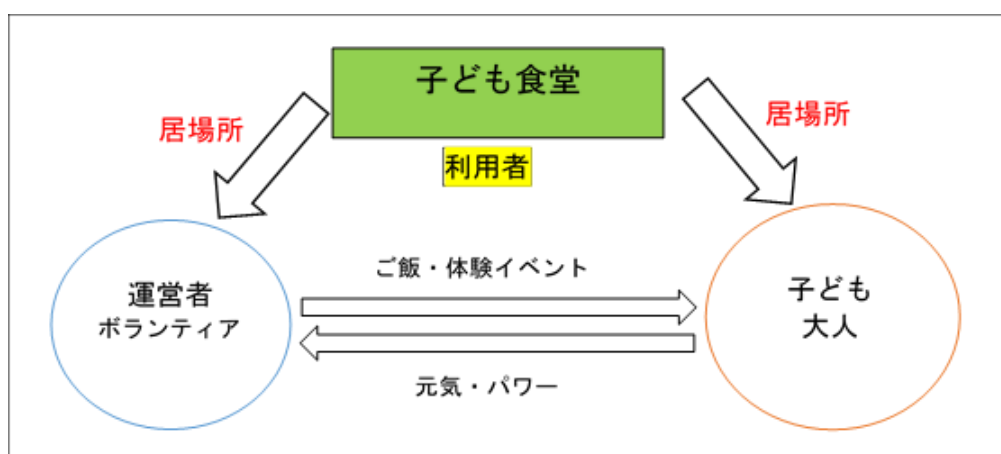


図 3

図 3 のように、子ども食堂があることによって特定の子どもや大人が救われるのではなく、運営者を含めて地域住民みんなが救われているのではないかと考えた。子ども食堂が、運営者やボランティア・大人と子どもに居場所を与えてくれる役割がある。

さらに、この子ども食堂の関係性について、贈与のような関係性が見えてくるのではないかと仮定する。贈与とは、金品や品物を送り与えることと書いてある。さらに調べていくと、贈与論があることが分かった。贈与論とは、贈与と交換について、いかなる規則によって贈

り物を受け取るとお返しする義務が生じるのか、また、贈り物はいかなる力があって受け手にお返しをするように仕向けるのかを論じている。贈与を構成する3つの義務として、与える義務、受け取る義務、返礼の義務があるとされる。この贈与論を考えられると、子ども食堂の運営者の構図が当てはまるのではないかと思った。子ども食堂はお互いが贈与の関係性で結ばれていると考えた。

このことから、子ども食堂利用者は子ども食堂にいる人全員ということになると思う。子ども食堂とは、保護者の就労等により、家庭において保護者らとともに食事を摂ることができない子ども等を防ぐため、夕食の提供や交流を図り、子ども食堂に参加する子どもたちが、子ども同士あるいは、子どもを支える支援者らとともに過ごす取り組みである、と言われ、子どもを助けることから始まったが、子ども食堂があることによって、すべての人が救われる可能性も秘めている。

次のケースでは、実際に参加したことがある4つの子ども食堂について、子どもたちと触れ合っただけ感じたことや子ども食堂の様子について述べていく。

#### 1. 参加した子ども食堂の体験から

参加したことがある3つの子ども食堂について詳しく書いていく。1つ目は約1年半通っている知多郡東浦町にある「はるたま子ども食堂」である。「はるたま子ども食堂」は平均参加人数が約100人など子どもの数が多い子ども食堂である。また、保護者も15人前後いるなど大人数の子ども食堂だ。100人もいると子どもの名前や年齢などは覚えづらいが、1年半参加し、子どもの名前や年齢、行動などが分かるようになった。参加したなかで最も多い人数の子ども食堂で子どもたちの年齢や望んでいるものを考えていきたい。

#### 子ども食堂はるたま

初回開催：2017年6月

開催日：毎月第三金曜日 15時から19時

開催場所：

平均参加者数：100人くらい

<はるたま子ども食堂について>

はるたま子ども食堂は、たまごの会が運営している。フォーラムで「この地区にもご飯を食べられない子どもがいる。たまり場があれば救える」という言葉を耳にし、大変ショックを受けたのが、この会を立ち上げるきっかけになった。役場などでも話聞き、考える中で、子ども食堂をプレオープンすることが決まった。チラシを作り、石浜の全地区に回覧をした。回覧が回ると、住民の方から、反響があり、「何かお手伝いをしたい。」といった声が集まり、地域の人たちが手伝ってくれた。このような形で子ども食堂をはじめ、現在は3年目に入った。

子ども食堂では、毎回工作をしており、地域の人たちがボランティアで協力して開催している。工作は子どもがわくわくするようなものが多い。木のおもちゃ作りや石で魚を作り壁に張れるようなものなど、すごく心を踊らされ、家ではできないようなものが多い。子どもが多いがボランティアの協力もあってとてもにぎわっている子ども食堂という印象を受ける。

#### <子どもたちの様子>

はるたま子ども食堂は、未就学児から小学校6年生の子たちが多く集まる。小学校低学年が多い傾向にある。平日に開催しているため、学校が終わり次第子ども食堂へ来る子どもが多い。早い時間は比較的に小学校低学年が多く、小学校高学年は食事準備開始30分前からたくさん来る。未就学児は、兄弟や親と一緒に来ている子が多い。

毎月、工作教室が開かれるが参加する子どもは、低学年が多い。早い時間から開催されるため、早く来る低学年が参加しやすいが、高学年の子も、まだあまりがあれば、一緒に作る。

様々な学年と二つの小学校区が集まり、100人を超えることもある子ども食堂だが、同じ学年の子同士や似た学年の子同士で集まって遊んでいることが多い。低学年は、外や室内で鬼ごっこや、だるまさんが転んだなどして遊んでいる。高学年はまとまって、宿題をしたり、携帯電話を見て遊んだりしている子が多い印象である。しかし、多学年に兄弟姉妹がいる子は学年関係なく遊んでいる印象がある。また、子どもたちの話を聞いたところ、兄弟姉妹がたくさんいる子が多い印象を受けるため、学年関係なく遊んでいる子もいる。食事の時間も多少は学年で分けられたりはあるが、関係なく食べている子も多い。子どもたちの喧嘩も比較的に少なく、たびたび、怒られている場面もあるが、のびのびと明るく過ごしている。

#### <子どもたちの声>

子ども食堂へ来ている子どもたちに少し話を聞いた。

好きなところを聞くと、一番多かった声は、「ご飯が食べられる」「ご飯がおいしい」という声が多く、ほとんどの子が「ご飯」という言葉を口にした。次に多かった声は、「友達と会える」という声であった。クラスが離れていても、子ども食堂へ来れば、一緒に遊べるし、みんなと会えるのが楽しみという声が多かった。そのほかの意見としては、お土産があるところや、たくさん遊べる場所といった意見が多かった。

このことから、子どもたちは一番にご飯を望んで来ているということが分かった。

二つ目は半田市にある「キッズサロンなるこどりーむ」である。「キッズサロンなるこどりーむ」は子どもの人数は15人ほどであるが母子寮に住んでいる子どもを主な対象としている子ども食堂である。他の子ども食堂とは違う子どもの様子などが見られるのではと考えた。

#### キッズサロンなるこどりーむ

開催日時：第3土曜

平均参加者数：15人ほど

#### <キッズサロンなるこどりーむについて>

開催場所の近くに母子寮があり、そこで暮らす子を主に対象にして開かれている。母子寮に暮らさない子でも来ても良いが、規模や会場の大きさから考えて、母子寮に暮らす子を主な対象にしていると聞いた。母子寮に暮らす子は、親が夫からのDVや親の離婚で暮らしている子が多い。また、精神状態が良くない親を持つ子もいる。

10時ころから子どもが集まり、子どもたちは、持ってきたゲーム機で遊んでいる子が多い印象だった。また料理を手伝ったり、外で遊んだり、部屋で折り紙をしたりして遊んでいた。食事の時間になるとスタッフの人たちもみんな食べていた。ご飯が終わると外などで

遊び、帰る時間になったら、随時帰っていく。

<子どもたちの様子>

子どもたちはそこまで多くないが、小学校1年生から中学生まで来ていた。(中学生は食事の時間のみ)。みんな同じ寮に住んでいるからか、学年関係なく、全員顔見知りといった感じであった。子どもたちは低学年の子は折り紙や絵描き、外で遊ぶ子が多い。中学年から高学年になってくると、ゲーム機で遊ぶ子が多い印象だった。また、小学校低学年の子が喧嘩したら高学年の子が止めることや、低学年の子をお世話するなど、下の子の面倒を見ている場面も多く見受けられた。また、喧嘩になる場面も多く感じた。

三つ目は、常滑市にある「学びの場 子どもの家」である。「学びの場 子どもの家」は、土曜日の午前中に開催し、親と一緒にご飯が食べられない子が対象の子ども食堂である。子ども食堂開催場所へ子ども食堂のスタッフが子どもを送り迎えすることが多い。子どもの人数は参加したとき15人ほどであった。

#### 学びの場 子どもの家

開催日時：第1・第3土曜日

平均参加人数：10人ほど

<「学びの場 子どもの家」について>

「学びの場 子どもの家」は常滑市社会福祉協議会の直営である。親と一緒にご飯を食べられない子限定で子ども食堂を開催している。子どもたちはスタッフさんたちの送迎で来る子もいる。子ども食堂は10時ころに集合し室内などで遊び、工作などもしている。ご飯を食べる前に工作などをし、ご飯をみんなで食べ、終わり次第、スタッフが子どもたちを送り届けるといった様子であった。

<子どもたちの様子>

子どもたちが集まり次第、季節のイベントの工作や歌を歌ったりしてみんなで遊んでいることが多い。子どもたちは、スタッフさんの言うことを聞き、活動をしていた。小学校低学年の子は工作などに一生懸命に取り組んでいる印象であった。小学校中学年ころの男の子はあまり乗り気ではなく違うことをしだす子もいたが、スタッフさんが注意するとしぶしぶ応じていた。小学校高学年の子は、低学年の子の面倒を見たり一緒に工作に参加したりする場面も多く、手先が器用になるからか、できばえが良い作品が並んだ。また、食事中、ごはんを食べたがらない子どもがいて、小学校高学年の子が子どもを説得していた場面もあった。

3つの子ども食堂に参加してみて、子ども食堂ごとに参加対象者や規模は違うが子どもたちの様子は似ているものがあつたと思う。ゲームをしている子が多い食堂もあつたりするが子どもは来れば元気に遊び、ごはんはみんなで一緒に食べるが多く、子どもも大人も高齢者もみんなで作り上げている「子ども食堂」という印象を受けた。子ども食堂では運営者や利用者などは一応の区別はあるが、子ども食堂へ来ていることによって運営者側も子どもも大人も利点もあるのではないかと参加した経験から感じるがあつた。



最後に アンケート調査からケースまでを振り返って

本稿では、子ども食堂のアンケートでは見落とされがちである、子ども食堂利用者について、子どもの年齢層の視点から検討をしてきた。だが、アンケート調査の結果から子ども食堂に来ている子の年齢では傾向が掴むことができなかった。しかし、子ども食堂の利用者についての視点を変えてみると子ども食堂利用者は子どもや大人だけでなく、運営者やボランティアも含めて利用者ではないかと考えた。子ども食堂があることによって子どもを救うだけでなく、子どもを育てる親、さらには、運営している人やボランティアも救われているのではないか。子ども食堂があることによって地域の住民が救われる、ということが分かった。

子ども食堂をさらに地域の居場所として、地域住民が救われるといったものにしていく必要があると思う。子ども食堂の地域の居場所という機能をもっと発達させる為には、子ども食堂についてのさらなる調査や居場所についての調査が必要になると思う。また、運営者が与える側になりすぎて、子ども食堂を閉じてしまうところもあるという話を聞く。子ども食堂が地域の居場所として、全員が、子ども食堂があることによって救われるというものにするためには、まだ足りないものがたくさんあると感じる。

だが、今後、子ども食堂があることによってみんなが救われ地域の居場所として機能するには、どうすればよいのか今後に向けて考えていきたい。

子ども食堂が地域の居場所・救われるようにするために、まず大切なことは、子ども食堂をしっかりとした知識で考えてもらうことにあると考える。子ども食堂は、貧困問題とセットで取り上げることが多いため、子ども食堂＝貧困の子が行くところとして認識されやすい。もちろん、貧困の子限定で子ども食堂をしている子ども食堂もあるが、調査であったように子どもを含めて誰でも来て良いといった子ども食堂が多い。子ども食堂＝誰でも来てもいい場という認識にしていく必要があると思った。子ども食堂は学校でもない、家庭でもない、仕事場でもない、居場所である。子ども食堂を通して各々の居場所を見つけていく必要がある。

各々の居場所とは、子ども食堂で子どもとして体験イベントに参加しご飯を食べるだけでなく、運営者側やボランティア側として参加することも自分の居場所に繋がっていく。子ども食堂が居場所として機能するために、今後に向けて子ども食堂の数などを増やしていく必要があると感じた。

#### 【参考文献】

- ・子ども食堂活動の意味と構成要素の検討に向けた一考察

吉田祐一郎 2016年9月

- ・子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題

文部科学省

- ・子ども食堂知ってる？運営にかかわってみたい？

株式会社インテージリサーチ 2019年2月27日